
M.I.S.s. ~ 魔法バカの六人 ~

にゃあプー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M・I・S・S ～魔法バカの六人～

【Nコード】

N8718X

【作者名】

にゃあプー

【あらすじ】

主人公、小橋悠斗は兄が突然消息を絶ったのを心配していた。だがその兄が消えた場所が問題だった。空に浮かぶ人工の島、通称《天空島》。そこにある地球側で唯一の魔法学院での出来事だった。入国審査が厳しい天空島に入ることができなかった悠斗に、ある日魔法学院から入学願書が届いた。

プロローグ（前書き）

まだまだ文章を書くのは下手くそですが、構わず出します。主人公は強い予定ですが最強じゃないかも…

プロローグ

青い海の上空に浮かぶ島。

直径およそ5キロに及ぶ都市築かれ、外周部には作物を作る農場や人工湖などが存在する。

都市の道路は石畳であり、建物もビルなどではなく西洋の建物を真似て作られ、そして環境整えるため様々な機械が10層まで作られた地下に設置されている。

地球側で唯一の魔法学院があり、科学と魔法の融合でできた次元演算システム結晶『MOTHER』が管理している情報局がある島でもある。

島の名は《天空島》

そこは世界中の人が知っている、この世界と異世界を繋ぐ唯一の場所。

《異世界の門》が存在する場所でもある。

天空島、地下第6層。

「なあ、シャル。この状況何時まで続くと思う？」

今のこの状況に飽き飽きしてきた俺は、俺の前方にいる金髪の女性に話を振る。

「そんなの知らないわよ！そんなことは気にする時間があるなら、あんたも目の前のガーディアンを潰しなさい！あーもう、次から次へと出てくんじゃないわよ！」

シャルこと、あるグループに選ばれた数少ないメンバーの一人である。俺も一応そのメンバーの一人である。

俺たちは地下6層にある天井、壁、床が黒い結晶で出来た一本の通路上で戦っている。一体たりとも後ろへは通さないようにするために・・・

俺たちの目の前には無数の二足歩行マシン、奥にある重要な物を守るための侵入者迎撃機械、通称『ガーディアン』が俺達の通路の先から続々と出てきている。

ガーディアンは人間をモデルに作られた機械であり、体長は小さいが頭、胴、足等々作られている。しかし手だけが筒のようになっている、そこから魔力弾——属性などない魔力の塊——を発射して敵を排除する。

俺達には魔法障壁をつくり出せるから、一発一発はたいした威力ではないが…なんせ数が多い。俺達の魔力も無限じゃないので持久戦になると危険である。

「やばいんじゃないの？コレ」

「それさつきも聞いた！リリー達が解析して何とかしてるから、それまでよ。あんたは、つべこべ言わず私を手伝えばいいのよ！」

「……へいへい」

彼女はそう喋りながらも、長い髪を揺らし氷作った巨大な槍を振り回してガーディアンを撃破し続けている。

彼女の補佐をしている水の精霊獣ワルジョビも無数の氷の玉を空中に出現させ、マシンガンのごとく撃ち出してシャルが砕き損ねたガーディアンを粉々にしている。

ちなみにワルジョビはシャルのパートナー、見た目は水で出来た大型の狼の精霊。

俺もやりますか・・・俺は弓を構え、そこに3本の小さな火の矢を出現させ、その先を鋭く尖らせる。狙うはガーディアンの胸。

ガーディアンを動力源は胸のところにある魔法核、ココさえ打ち抜けばガーディアンは動かなくなる。だが魔法核は手のひらより小さく狙うのは難しい、なのでシャルのように近接で壊すほうが無難である。

だが相手は機械である、多少壊しても動く。

倒したと思っていたガーディアンがまだ動き、変な方向からの攻撃を受ける可能性がある。まあソレをさせないためにワルジョビは粉々にして壊しているんだと思うが・・・

俺は小さなころから射撃だけは得意、この距離ならならガーディアン of 小さな核を狙うことはできる。だが俺ができるのはそのくらいなわけで・・・

「飛炎、ちょっと力貸してくれ。」

俺はそう言つて3体に向けて同時に炎の矢を放つ。その矢はみるみる巨大になり、まるで吸い込まれるかのごとく3体のガーディアンの胸にあった魔法核を撃ち砕き、そのまま勢いを止めず方向を変え、他のガーディアンの核まで貫いていく。3本の矢で約10体のガーディアンを停止させた。

俺の相棒の精霊獣が飛炎。

飛炎は炎のできた鷹くらいの鳥と言つていいだろう。現在俺の頭にとまっているが熱くはないし髪も燃えない。

飛炎は尻尾が超長い、俺の頭にとまっているにもかかわらず尻尾の先は地面についてしまっているほどである。

コイツは一人でも？いや違つたな...1羽でも魔法使ったり、炎を

吐いたり、その辺りを燃やして倒すことなど造作もないはずなんだが、誰に似たんだか大抵やらない。俺が言う事もしたり、しなかったり。

そんなでもって、して欲しくない時に限って炎を吐いたりする。特に周りに油とかよく燃えそうな物があるときに限って、狙ってやってないか？ってくらい、炎をまき散らす。そして炎上したら自分は関係ありません、とどこかに飛んでいってしまう。どんだけ俺が怒られたことやら・・・

普段は俺の肩やら頭の上に止まり居座り続ける。まるで置物になったかのごとくピクリとも動かないときだってあるのに。

まあそんなことはどうでもいい、飛炎でも流石に戦闘中だったら手伝うことぐらいはしてくれる。もちろん自分は定位置から動かない。鳥の姿をしているだけあって目が物凄く良く、射撃の能力が高いみたいである。

おっと少しの時間思考していたら、シャルが討伐し損ねた3体のガーディアンが俺に向かってきている。

「んじゃもう1回頼むぜ、飛炎」

先の同じように1本炎の矢を作り放つ。しかし矢は今度は巨大にならず1体の核を貫いただけで止まる。

「おい！飛炎！」

俺の頭に視線を向けると、飛炎は横を向いて完全にやる気なし。そんなことしている合間にも2体のガーディアンは俺に近づいてきている。

こういう時くらいは言うこと聞いてくれよ！いくら障壁で防げつつていつても、2体から連発で撃たれたらかなり痛いんだぞ！と相棒を心の中で愚痴りながらも前方に障壁を張り、ガーディアン魔力弾に備える。

ガーディアン銃口に魔力が溜まり、今まさに放たれる。

——と思った瞬間、突然ガーディアン頭上から巨大な氷の柱が降り注いで2体のガーディアンが潰されていた。

「バツカじゃないの？あんだ！なんでも感でも精霊に任せすぎよ！たまには自分でやりなさいよね！」

いつの間にかシャルが俺の近くまでやってきてきた。

「別に良いじゃねえかよ！そんなお前だって、少しは制御しろよな！完全にオーバーキルだろ。てかさっきから手を抜いてるだろ！ガーディアン撃ち漏らし数が増えたぞ。もしかしてその程度しかできないのか？威力の強い魔法しか撃てないくせに、その程度だったのか・・・使えないやつ」

シャルは顔をうつむきながら体をプルプルと震わしている。

よし！この感じならあともう一押しか？こいつは『使えないやつ』とか『出来損ない』というような言葉には超沸点が低い。あとはこのイライラをあの手でガーディアンに向けてくれればよし。珍しく今は飛炎が前に出てガーディアンの上から炎の雨を降らせて食い止めてくれている。

「できないなら仕方ないな、俺も手伝って倒してやるぜ」

俺がそう言うとシャルは震えをピタッと止め

「貴方の手伝いなんていらないわ！一人でやってやるうじゃないの

！そこで見てなさい。この私がこの程度じゃないことを見せてあげるわ！！！」

そう叫ぶと、シャルはガーディアンを抑えていたワルジヨビのとこまで行き、一言二言しゃべると少し後ろにさがった。主人を守っているワルジヨビに、俺は一瞬睨まれた感じがしたが、まあ気にしない。

彼女がこの程度じゃないことはよく知ってる。彼女の巨大な魔法はもう何度も見てるし、この程度なら一瞬で屠れる力があることは分かっている。

ここはシャルに任せて俺は休憩でもしてますかね。通路の壁に寄りかかり座ると飛炎がもどってきた。

こいつも俺の近くで休憩するみたいだ。

壁に背を預けながら、一度シャルのほうを見ると、手には2対の青い刀身の剣を握っていた。

・・・シャルの奴、マジモードじゃねえか。まあこれで本当に俺は何もしなくいいな。シャルが全部片付けてくれるだろう。

俺は目をつぶり何でこんなことになったのか思い出してみることにした。

日常（前書き）

まだまだ拙い文章ですが・・・ヒロイン候補投入。さてどうなるやら...

日常

10年前突如、太平洋上空に巨大な門が出現。後に《異界への門》と呼ばれる、青い特殊な金属でできた両開きの門が出現したのである。

門からの距離が、1番近いこともあって日本に調査本部が置かれ、門を調べ始めるが…太平洋上空1000mに柱も何もなく浮いている門を調べるのは困難であり、調査は難航した。

それでも調査団は何とか調べあげ、使われている金属は地球に存在しない物であり、さらに門を開けようと試みるが失敗が続いた。だが出現してちょうど1年経過した4月4日に、門は突然開いた。

「門の奥には何処かの森の中に繋がっており、沢山の様々な人種が待ち構えていたという。」

当時の調査団長のロビン・アウストが異世界人との最初の交渉にあたり、なんとか闘争へは防げたと言われている。これを評してロビン・アウストには地球平和賞が送られた。

ロビン・アウストは試験にでるから覚えておけよ。現代史に置いたの超重要人物だから、今でも覚えて当たり前くらいの人物だから必ず覚えるように…今日はここまで」

先日担任の先生がこのように言っていたが、今、この世界は異世界の門の開通により劇的に変化している。

亜人という未知なる種族との交流！

そして地球とは全く異なる生物が住む世界！

さらに魔法という名の新たなエネルギー！

全てが同時に発表され、両方の最先端に行くのが太平洋に浮かぶ門と繋がるように作られた都市、天空島。

俺、小橋悠斗こはしゆうとはそんな天空島へ行く方法を探っていた。

成績は下から数えたほうが早いし、スポーツも特別できるわけでもない。しいて言えば弓道をやっていたせいか、手裏剣や消しゴムやチョークなどの、飛び道具を的のど真ん中に当てる、ちょっとした特技があるだけ。特に消しゴム、丸めた紙などを授業中友人に当てるのは超得意。

弓道をやっていたので学園の弓道部に誘われたが、あの静けさはどうにも居心地が悪く、幽霊部員である。

そんな俺が天空島に行きたい理由は、かつて俺の…

「ユー…！…ユー君！」

俺の身体が地震のごとく揺れ、考え事を無理矢理中断させられた。

「何だよ、蓮華れんか。考え事してたのによー」

俺に地震を体験させたのは、横をいつもピタリついて歩いて帰る、腐れ縁でありながら幼馴染のお隣りさん、大倉蓮華おおくられんか。

「だってもう家の前だよ。そのまんま歩いて行きそうな勢いだっただし。」

「あっホントだ、いつの間に…」

ちょっと思いにふけていたら自分の家まで帰ってきていたようだ。

「まあいつもユー君は、お義兄さんのこと考えてる時は周り見えてないよね。今回もお義兄さんのこと考えてたんじゃないの？」

「・・・まあ、なくもないかも。そして蓮華よ、いつも言ってることだが、俺の兄貴を『お義兄さん』と呼ぶのはやめないか？」

「なんで??? お義兄さんになる人を、今からお義兄さんって呼ぶ練習してたら駄目かな？」

そう、蓮華にまた新たな称号が付きそうなのである。

婚約者、嫁、妻。こんなのが付きそうなのである。

先日俺の母親が

「あんた婿に行きなさいね。」とのたまった。
何をいきなり！と返すと

「蓮華ちゃんとあんたの結婚の話よ。こっちは優一もいるし何にも問題ないから、大人しくあっちの家に婿に行きなさい。」

「もし嫌だと言ったら？」

「そうね、法律で問題ない外国にいつて次の日に結婚式ね。私は譲歩してあげてるのよ、あんたが蓮華ちゃんと結婚してもいいと思える日まで、できるだけ待っててあげるんだから」

もう突発的なことが起きない限り、決定事項みたいな感じである。
その原因も何となく分かる。

大倉蓮華、身長は俺より低い、肩まで延びる髪がいつもサラサラしていて、たまにオレンジみたいな匂いが漂ってきたりして・・・
まあ腐れ縁のひいき目かも知れないが顔は可愛いと思う、胸は残念だが……。さらに勉強は優秀であり、運動神経もよく、明るく人気者である。だがひそかに恐れられてる人物でもある。

俺に近づく人に対してだけは異常な人物になる。

俺とちよつと話していた女子に蓮華が冷え切った視線——特に巨乳の場合——を送ってるのを、俺は何度も見たことがある。それを俺が見ているのが分かると、さっきのは錯覚だと思うほどの明るい蓮華に戻ってたりする。

次の日、その女子は欠席なんてことがあつたりする。偶然だと思いたい……

さらに蓮華は学園長の娘だったり、大手企業の会長の孫だったり、生徒1人くらい行方不明にできそうなくらい権力がある。蓮華の両親は娘を超溺愛してるからなく、蓮華の頼み事ならやりかねない。

俺が今の学園にいるのも、多分蓮華のせいである。

担任が面談で、君の受ける学園はここだね、って進路に書いてもない学園を語りだしたり。

両親もこの学園だけは確実に受ける！とか言い出したり。

これは偶然かも知れないがその学園以外全て落ちた、確実に入れると思っていた安全圏のときまで。

「どうしたの？私の顔なんかジッと見つめて。なんか顔に付いてる？なら早く言つて！そんな風に見つめ続けられると流石に照れるよ」

「……悪い。顔には何もついてない。ちよつと考え事してただけだ。……じゃまた明日な。」

蓮華にそう告げた時、ふと誰かに見られているような気がした。

周りを見渡すと、道路の先に人が立っており、俺のほうを見つめていた。その人物は背中には大きな……剣？を背負っており、身体にも鎧などしていた。

誰だ？知り合いか？それとも単なる西洋鎧のコスプレ野郎か？俺がよく見ようと目を凝らすと、その人物は忽然と姿が消えた。

む……。

目を擦ってもう一度見るが…いない。

見間違いだったか？でも確かに人がいた気が…
いくら考えてもどうにもならないので、人影は俺の勘違いだったということにした。

家の前で蓮華と別れ、玄関で靴を脱いで家にあがったのと同時に、ピンポン！と呼び鈴が家の中に響き、俺宛てに市橋祐子^{いちよしゆうこ}って人物から段ボールの荷物が届いた。

誰だっけ？市橋祐子って…

自分の部屋で中を開けると分厚い本やらカード、封筒、それにナイフや数種類の草、そして緑の液体が入った瓶まで出てくる。

誰が何でこんなもの送って来たんだ？

送ってきた場所を見ると天空島4159、ルナ331とあった。

日常（後書き）

誤字脱字、あるかもしれません。感想&アドバイスなどありましたらジャンジャンどうぞ。お待ちしております。

送られてきた物（前書き）

前の2話にくらべて、多少長くなりました。ギリギリ間に合ってた。かった。

送られてきた物

てんくうじまああ？！

何で天空島から？天空島で俺と関わりのある人物というと・・・
まさか兄貴か！？

そうなると市橋祐子って名前は、ひらがなにすると《いちばしゅうこ》。これを少し並び変えて《こばしゅういち》。やっぱり兄貴からだ。でもなんで偽名で…

小橋優一こはしゆういちは俺と3つ歳がはなれた兄である。

3才でヴァイオリンを習い、5才でコンクールで1位をとりエリートコースが待ってると思われたが、突然辞めた。

小学校にあがるとサッカークラブに入り、FWでスタメンとなり、その年のMVPと得点王に輝き、そのまま中学も続けるのかと思いきや、またしても辞めた。

中学になると、今度は美術部へと転向し、風景画を描き金賞。審査員からは『君の絵は人々に感動を与える絵だ』と言わせるほどだったらしい。——そしてまたしても辞める。

そして武道に通い始める。剣道・柔道・空手、それぞれ習い数週間であ上をバツバツと倒していった。

もちろん学業も優秀。兄貴自身は決して認めないが、兄貴は『天才』という人種だ。

兄貴自身が言うには「俺は多少器用なだけで運動でも芸術にでもその事に特化した才能がある奴には勝てねえ」とのこと。器用ってレベルじゃないと思うけどな。

そんな兄貴に2年前、突如天空島にある魔法学院からの入学願書が届き、兄貴は受験し見事合格して天空島へと一人行ってしまった。1年目は何かと連絡をくれたがあるころからピタリと連絡がこなく

なった。

両親は兄貴が子供のころからしつかりしていて、連絡がこないのはただ単に忙しいのだろうと、特別心配はしている様子は見られない。

だが俺自身は妙な感じがして、兄貴に何かあったのではと思う。あれから天空島のことを独自で調べたが…内部情報は極端に少なく兄貴のことは全く分からなかった。

そんな時に天空島から兄貴が偽名で奇妙な物を送ってきた。

やっぱり兄貴が何かに巻き込まれて、密かに送ってきた物と考えるのが普通だろう。そう考えて中身を見ると本は魔法の本、草は何かの調合に使う材料で、瓶の液体は魔法薬って奴ではないのか？そしてナイフは護身用、カードは………浮かばないが何かあるのだろう。

A4の茶封筒に何か書いてあるかもしれないが、今は一旦全部出してダンボールを片付けないと…俺の部屋が狭すぎる。

なぜコレを送ってきたとか、兄貴はどうしてるとか今考えても思いつかないので、とりあえずダンボールみたいな箱をたたもうとしたり、

「ん？この箱底に板が入ってるのか…」

極薄の板が底に挟まっているのに気付く。

この板、ダンボールみたいな底に見えるよう絵が描かれている、見ただけではほぼ見つけることができないほど、精密に立体的に描いてある。俺が中身を全部出してたたもうと思わなければ気づけなかったほどである。

ここまでカモフラージュしてあるってことは…

何とか底から板を外すと中から一通の白い小さい封筒がでてきた。白い封筒にはDear my brotherと書かれており、透かしてみると何枚か紙が入っているようである。

ダンボールは俺宛だったから、多分コレも俺に宛た物だろうと思う。何故英語？と思うが…もしかして俺が知らないだけで、他に兄弟とかいたりするのだろうか？

しかし偽名まで使ってさらに隠してまで送ってくる物…なんか嫌な予感。どっかの極秘書類とかで命狙われるとかだったら、開けたくないよな。

でも開けないことにはどうにもならないし——だが開ける前にダンボールを片付けないと、俺が動けなくなる。

ダンボールを片付けて、ある程度整理してからベツトに腰掛けながら白い封筒をあけると、中から手紙が二通でてきた。

兄貴の状況でも書いてあればいいんだが…んー何々？

『悠斗へ、生きてるか？死んでたらスマン。』

聴きたくない言葉がいきなり出たよ！

『この手紙がお前に届く時、俺はまだ生きてる。と思う、多分。』

あっち行って何やらかしたんだよ！兄貴！

『まあちよつと失敗してな。悠斗、お前が生きてるなら近いうちに面倒なことが起こると思う。そのため…』

——カタッ

……………今、何か音しなかったか？それも結構近くから。

周りを見渡すが俺の部屋に誰かいるはずもなく。動物とかいるわけでもない。

気のせいかな…最近多い気がするな、俺神経質になってんのかな。

『お前が生きてるなら近いうちに面倒なことが起こると思う。そのためにおま…』

——ガタツ、ボスン

…やっぱり気のせいじゃなかった。机の上に置いておいたはずの、送られてきた本が今は床に落ちている。さっきの音は机から本が落ちた音だ。

兄貴よ…近いうちにつて言うより、もう面倒なことが起こって気がする、目の前で。

そのまま様子を伺っていると、床に落ちている本が自動的に開き、パラパラとページを勝手にめくっていく。そしてちょうど半分あたりで止まった。

そして開いたページに書いてある文字が、紙の上を動き出し中央に集まり始める。そして本の中央には黒い円が出現していた。

だがそこで止まった。俺はしばらく様子を伺っていたが、その後コレといった動きはしなかった。

あら？魔法が発動するのかと思ってたが、違ったのか。それとも不発か？ふう～脅かしやがって。爆発とかするんじゃないかと思つてビクビクしてたのがバカじゃねえか！

そうしてベットから立ち上がった——その時、俺に向かって黒い物体が飛び出してきた。

とっさに避け、近くに置いてあったナイフを即座に取り、投げつける。

飛び出してきた生物、巨大な口と牙を持った体長50cmの真っ黒なイモムシは、狙い通り頭らしき場所にナイフが刺さっており、霧散して跡形もなく消えた。

——だが喰われた。

俺の指のほんのわずか先と、手に持っていた兄貴からの手紙が、本から飛び出してきた黒いイモムシに食われた。避けてなきゃ腕こ

と持っていていかれてたコースだけだな。

「くそっ！狙いは兄貴からの手紙か！」

三角形になった手紙の端しかもう残っていなかった。

親父の勧めの道場に兄貴と一緒に通わされていたし、兄貴の武術の相手にされていたので、今回はなんとかあったけど…。

この怪しげな本同様に、茶封筒や中に入っていたものを部屋の片隅に、慎重に移動させて置いておく。

くそ、兄貴の手紙には何か重要なことでも書いてあったのか？さっきのは魔物だよな、毎回こんなだとやってられないぞ、一体兄貴は何に狙われてんだよ…

「ふぁーあ、ねみいい」

流石に外が明るくなりかけるまで起きてると眠いな。やはり本は魔道書であつたみたいだが、その後は何もなかった。背表紙に異世界の文化の言葉か、分からない単語が混じり、詳しくは解析はできなかったが、あつちの世界のものだろうし魔物が飛び出してくるくらいだし魔道書だろう。

まあ魔法には魔力というエネルギーが必要ということだけは分かっているし、下手に扱わなければ大丈夫だろ。

今日の学園に行く準備をして、

「おはよう母さん。朝飯何？」

テレビを見ている母親は振り向きもせず、テーブルを指す。

母親は朝のテレビの占いを見るのが趣味？である。1月から12

月まで漏らさず見て、さらに占いをやっている他局のまで全てみるのが日課だ。時にはメモする時もある。その時間帯だけはテレビの前から全く動こうとしない母親。

テーブルにすでに用意されていた朝食を食べ始める。

目の前には親父が食べたと思われる食器がまだ置かれていた。てか親父帰ってきたか？

朝まで起きていたが、帰ってきた音とか聞いてないんだが…

朝帰ってきてまた行ったのか？朝帰り、なんとまあ…

そんなことを考えながら朝食を終えて、家を出ると毎朝のことではあるが家の前に蓮華が待っていた。

「ユー君、おつはよ。なんか眠そうだね？面白い本でも見つかったの？」

あの本を面白い本って言ってもいいんだろうか？、

「おはよ蓮華。まあ興味深い本を夜中まで見ていたな。しかしよく分かったな」

「そりや分かるよ、ユー君のことだもん。予想だけとお義兄さんから荷物が届いて、その中にユー君が読みたくなる分厚い本があったんじゃない？」

「……ああ、そんなとこだ。」

あんた犯人じゃないよね？……いや、蓮華の場合だと俺ん家に隠しカメラでも設置されてるほうが可能性が高いか、俺にプライバシートスペースは存在しないのか！

今は証拠がないしな、今度徹底的に部屋の掃除してみるか。

「先生、天空島の学院に行きたいのですが、願書とか入手できませ

んか？」

俺は昼食を高速で腹に入れ、職員室にいる担任の先生に質問しにいった。

昨日のダンボールには兄貴が生きてる可能性があるってだけで、ほぼ分からないままである。あの手紙に書いてあったかもしれないが、喰われてしまったし確認の仕様がなない。

茶封筒ほうには何か書いてあるかも知れないが…保留。

やっぱり自分自身の眼で兄貴の状況を確認めたい。

そのためには兄貴と同じ魔法学院に入るのが手っ取り早いと考えての、さっきの質問である。

「とうとう今年も現れやがったか…毎年何人かいるんだよね、魔法学院行きたいって言う生徒が。それが小橋が最初とは思わなかったが、簡単に言う…無理だ。」

「先生、結論が早いですね。でもそこを何とかできないでしょうか？お願いします。」

頭を下げて担任に頼みこむ。

「何とかできるとかの次元じゃない。天空島の情報は何処の『国』も欲しがってるし、魔法学院の願書はどういう基準かわからんが、生徒個人に送られてくる。さらに魔法学院の願書一枚なんてオークシヨンで『33億円』とか値段ついてんだぞ。学園の一担任にどうにかできるわけがない。頼む相手が違うんじゃないのか？小橋なら担任の奴がいるだろ。」

俺もオークシヨンの話は知っていたが、現代史の先生なら知らないコネでもあるかと、薄い望みを賭けたんだがやっぱり無理か。

俺も蓮華に頼むほうが可能性は高いのは分かるが…とんでもない条件とか突き付けられそうだしな…蓮華の場合。

「ああそうだ言い忘れてた。小橋、お前は魔法学院のことは忘れてエスカレーター式に学園の高等部へ行けよ。下手すると俺のクビが飛ぶのでな。」

やっぱりこの担任にも圧力がかかっていたか…

送られてきた物（後書き）

戦闘ムズイ。手こずりました。誤字脱字、アドバイスなどありましてらドシドシどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8718x/>

M.I.S.S. ~ 魔法バカの六人 ~

2011年10月26日07時10分発行